

けっして特殊ではない関西生コン支部の取組み

―業界を巻き込む業種別組合運動

西山直洋

全日本建設運輸連帯労働組合近畿地方本部書記長

一 関西生コン支部の歴史

産業別組合の運動を続けてきた関西生コン支部の取組みをご紹介します。

関西生コン支部は、一九六五年に結成しました。当初から集団的な労使関係をつくっていかうということ、企業同士の競争を抑制する、労働組合が企業の競争をコントロールする、ということ、企業との集団交渉の取組みを進めてきました。

横のつながりのある企業と隣同士の企業を競争させない。統一的な要求をすることによって、統一的に交渉をし、統一的な妥結をする。交渉が進まない企業があれば、個別に行動をする。この方式ですとやっています。これは今も変わりません。

運動の広がりが変わってきたのは、二〇〇〇年に入ってからです。というのは、生コンだけではなく、生コンから近隣の職種も増やしていこうということ、セメントの粉をタンクロー

リーで運んでいる、セメント輸送の業界もよくしていくために、労働者の結集とともに企業の結集もしていこうという取組みを進めてきました。

これは、あまり大きく発信はされていませんが、関西一円にある、セメントの基地、サービステーション、当時、五四カ所ありましたが、そこを一斉にストライキしようということになりました。その要求はなにか。運賃のアップと先方引き取り車の増大阻止です。セメントメーカーが、わたしたちに対抗するために、安い労働者を業界の中に送りこんでいて、企業も含めてそういう労働者を業界から排除しようということと、セメントメーカーの迷惑どおりの、セメントの出荷方式の阻止のためです。

ここで、問題にしているセメントの出荷方式について説明します。

生コンは特殊ですから、メーカーが違うセメントの粉を運ぶのは、生コンの品質上、問題があつて難しい面があります。そこで、セメントメーカーは何をしようとしたか。セメントを輸

送する労働者を完全にメーカーから分離して、労使関係をなくしていくために、下請け化を進めました。セメントは勝手に運んでくださいと、そのサービステーションから粉を運ぶ、そこからメーカーは関係ないですよ、責任を取らないというやり方をして、広げていきました。われわれは、それでメーカーの政策に対してストライキに入った。

もちろん、運んでいる中小企業も新規参入業者が入ってくれば、競争相手が増えるわけですから、そこはわれわれと同調しながら、ストライキには協力をしました。経済的な打撃は企業側に与える形になりますが、目的が違つと、将来のことを考えて、企業が同意しながら行なわれた行動です。そういうことから作られたのが、バラ専門委員会ではここにバラセメント輸送協同組合やセメントメーカーも参加し運賃問題等を議論する場ができました。

協同組合に、輸送会社をすべて結集させることによって、運賃をセメントメーカーと協同組合が交渉できるシステムを作っていくと、そうすることで適正な運賃が受け取ることができるということでやりました。しかし、団交権の裁判となり、裁判では負けています。協同組合には団体交渉権がない、ということ、裁判では負けているのですが、われわれはいまだにそれを求める闘い方を現場で行っています。

その後、生コンを送り込む（圧送）労働者の結集を進めてきました。生コンを現場に持つ

ていって、構造物を建設するわけですが、構造物を建設するのに高層ビルの場合、いわゆるクレーンみたいなコンクリートポンプ車で、生コンを送り込む（圧送）、その労働者を結集しました。これは、ゼネコンから、いわゆる買いたたきですね。圧送料金というんですが、どんどんどん押し付けられて、企業として運営できないうような状況になっているところもある。ポンプ車というのはけっこう高いんですよ。生コン車は、高いのも一五〇〇万円ぐらいで買えるのですが、ポンプ車は、大型のもので一台一億円を超えます。かなり特殊な車で、買ったたかた業者がポンプ車を維持できないということもあって、われわれのところにも相談に来て、労働者も組合に入れることで、われわれと一緒に、いわゆる業種別にやっというところのこと、スタートしました。

そういうなかで、セメント輸送、生コン、圧送、という近い業種が三つ結集して、うまく運動形態ができたなかで行なわれたのが二〇一〇年の一三九日のストライキです。

これは、単に生コンの労組がストライキをしているということとは意味が違います。目的は、生コンの適正価格をゼネコンに買わせるというのが目的なのですが、実は、この闘いのなかには、生コン労働者に加えて、セメント輸送の労働者、そして、生コンの出口の圧送の労働者とリンクしながらやってきたということ。それはどうということかとというと、生コンがストラ

イキしてもやはり、抜け駆けする業者がいるわけです。ゼネコンにつられて、「高い値段でちゃんとうたるから、現場にもってきたくれ、納期の関係もあるから」とそれにつられていく業者がいます。ただ、圧送の労働者とストライキをしていけば、いくら生コンをもってきたとしても、打設（生コンを流し込む作業）ができない。生コンをもつていっても工事にならない。もうひとつは、抜け駆けする企業、生コンをつくるにあたって、バラセメントの粉が運びこまれない。生コンを作ることができない。

そういうようなやり方で行動を展開してきたのが、この二〇一〇年のゼネストです。われわれがよく言うのは、セメントメーカーとゼネコンなどの外部企業に収奪されないような仕組みをつくらうというのを関生運動でやっているわけですが、これについては、どの業種もできるのではないかと思います。

二 近畿地区トラック支部の結成

トラック支部では、とくに物流輸送業界は、本当に大変な状況で、それこそ建設業界と一緒に、下請け化が進んでいて、下請けの企業が働いている労働者は、まともな水準の賃金が支払われていない。当然いま問題になっています。そういう状況にあるトラック業界のシステムを変えていくということで、トラック業

界にも「関生型産業政策運動」を取り入れるために二〇一二年に結成されたのが、「トラック産業の将来を考える懇話会・近畿」です。

業者もひっくるめて、産業別の労使一体となった要求を掲げて、集団交渉していく、それを作っていくということ。これも完璧なものにはなっていません。タイミングというものもあるかもしれませんが、NOx・PM法（自動車から排出される窒素酸化物及び粒子状物質の特定地域における総量の削減等に関する特別措置法）という法律があります。たとえば大阪でいえば、これに違反すると一〇年以上トラックに乗れない（維持することができない）、適合車でなければ大阪に乗り入れられない、ということ。小さい企業だとトラックもまともに買えない状況がつづくわけです。そういう状況が重なったのと、軽油の高騰です。

そういうこともあって、中小零細企業がどんどん淘汰されているという状況が生まれてきたというのもありましたので、共通の目的をもつて要求を掲げて、経営者も巻き込んで、一緒にやっというところ、取組みをスタートさせていきます。生コンほど結果はでていませんが、いまじわじわと企業が結集してきているという状況になっていきます。当然、労組側も全日建だけではなく、全港湾にも運輸部会というのがありますから、全港湾の仲間と一緒に中心となって、企業もひっくるめて、労働組合と一緒に運動することによって、会社も利益があがり、その

利益を賃上げに回せという運動を進めています。

三 関西クラフト支部の結成

われわれは生コン以外の普通の一般の労働者の組織化もやっています。一番多い職場では、ホテルの労働者、サービス業ですけど、そこで一〇〇人ぐらい組織化したり、ということもしてきましたし、教育に関係する労働者、先生も含めて、そういう組織化もしてきています。

一昨年、関西クラフト支部というのを結成しました。これは、産廃業者・清掃業者を業種別に組織し、部会をつくって支部を結成したこと、もう一つは、介護職の労働者の組織化です。医療介護部会というのをつくって同じく部会を組織しています。そういった生コン以外の業種のメンバーたちをこの支部に取り入れようということ、関西クラフト支部が結成されたということ、関西クラフト支部が結成されたということ、とくに介護の問題でいえば、関西では、「安心してできる介護を！懇談会」を結成しています。八労組が入り、懇談・行動をし、関西で介護職を抱える労働組合と連帯をしています。

それから、地域で、介護職の業者もひっくるめて運動をつくり出そうとしています。なぜかというと直接的な労使関係のある介護職場といってもそこも非常に苦しい。全然もうからないようなシステムになっているのが介護の業界なので、その業者も含めて、運動を作り上げてい

かなければなりません。そういう目的で、業者もひっくるめて入れる組織を作ろうということ、で、やわらかい文言で、「安心してできる介護を！懇談会」という組織をつくって、いま政策的に進めています。まだ結果は全然できていませんが、そういう取組みをしています。

(にしやま なおひろ)

四 おわりに

関生は特殊だとよく言われます。関西生コン支部の運動も一〇〇%にできあがったものではないかもしれません。杭を打たれながら、それでも飛び出して、ということの繰り返しでやってきました。しかし、関西生コン支部の運動は、違う業種でも可能な運動ではないかと思っています。さきほど、木下先生のお話でもありましたように、非正規の問題が一番われわれも実感している問題です。非正規とともに要求をかかげて、そして妥結する。会社によっては非正規のほうに正社員よりも給料いい。そういう会社は少ないですが、これが本来の姿ではないかと思えます。非正規を使うほうがコストがかかるよということ、正規化を促す。関西の生コン業界では、ほとんど派遣というシステムは導入させていません。労働者供給事業があるので、派遣労働者は入れさせていない。資本側に都合の良いシステムは入れさせない。そういう取組みも含めてやってきました。決して、関西生コン支部の運動は特殊ではないということを理解しても